

「今日は大漁ね」とナミが言います。  
「今日は大漁だね」とナギが言います。  
「これで神殿も建てなおせるわね」  
「ぼくも葡萄酒を買っちゃおうっと。それもきみたちのおかげさ」  
と、漁の手伝いをしてくれたイルカにお礼を言います。イルカたちがうれしそうに体をむちのようにぴしゃぴしゃさせます。ここは神々が生まれた島デロス。エーゲ海色としか表現しようのない青い海とポセイドンの申し子たちのイルカに守られて、白い神殿がこれも海に負けず劣らず真っ青な空にすくと建っています。ナミとナギはこの神殿を守る神官につかえる侍従たちです。

いつもよりたくさんの魚をアゴラに持つていき、仲買人にひきわたすと、ふたりは野原に遊びに出かけます。

「キントス山に行こうよ」

「ええ」

カモミユのあまざっぱい香りが一面にただよう参道を、ふたりはぐんぐん上<sup>まつ</sup>っていきます。息をきらせながら、異国の神々を祀つてあるところにたどり着きます。外国人でしょうか、エジプトの女神イシス神殿の前で手を合わせている人もいます。ふたりもぺこりと頭を下げて、さらに山を登っていきます。

小一時間ほどで、ようやく山頂の神域に着きました。ナミは息をととのえてから鶴の舞を舞いはじめます。ナギもそれにつられていっしょに舞います。エーゲ

海にぽっかり浮かぶキクラデスの島々がつぎつぎに目にうつります。足もとには、アポロンの神殿をはじめとするデロスの町なみが広がっています。

ナギが、舞いながら水平線を指さします。

「ほら、あっちにずっと行くと、アテネやデルフィだよ」

ナミは、お父さんは神官としてデルフィに行ったのよ、と亡くなったお母さんが言っていたことを思いだします。

「行ってみたいなあ」

「ナミならきっと行けるさ」

巫女学校を優秀な成績で卒業すれば、デルフィかアテネに留学させてもらえます。

「いっしょに行けるかしら？」

「うん。船倉にでもぐりこんで、ついて行っちゃうよ」

ナギはデロス市民の子ではないので、学校に行っていません。ナミたちが学校に行っている間、お魚をとったり、畑の手伝いをしたりしているのです。ナミは学校に行くのが仕事のようなものなので、神殿の仕事を手伝う必要もありません。けれども、学校のない日や放課後に、こうしてナギの手伝いをしています。

ふたりがアゴラにもどると、仲買人が今日の売上げだよ、と言ってお金をわたしてくれます。